

(論 文)

## 19世紀初頭アメリカ合衆国における動物愛護 — 世紀転換期の政治情勢からみる社会的意味の考察を中心に —

白石（那須）千鶴

---

### キーワード

革命期 反ジャコバン主義言説 暴力嫌悪のイデオロギー 奴隷制廃止運動  
動物愛護言説

---

### はじめに

本論文の目的は、19世紀前半期アメリカで多数出版された家庭向け書物に著された動物愛護の言説に着目し、それらのメッセージに込められた政治的主張を読み解くことである。そのために動物愛護の精神の形成過程として18世紀末の革命期まで遡り、革命期の政治状況との関わりの中で動物愛護のメッセージに託された「暴力を嫌悪するイデオロギー」を分析する。

近代のイギリスおよびアメリカの動物愛護の精神については、キース・トマスやジェームズ・ターナーなどの歴史家たちが、人道主義と深い関連性を持つ感性として議論してきた。これまでの議論から、動物愛護の萌芽はイギリスでは17世紀末に現れていたことが指摘されている。例えば17世紀中頃イギリスでは、紳士のたしなみとして「優しさ」を重視する記述が見られるようになっていき、この紳士の「優しさ」が、動物にも向けられ、思想家たちによって動物への待遇が言及され始めていた。さらにこうした同情的な動物観は、同時期のキリスト教の教義にも見出されている。17世紀後半には神の創造物のすべてがそれにふさわしい待遇を受ける権利があるという考えを、プロテスタントのリベラルな聖職者たちが受け入れていくという大きな転換点を迎えていた。こうして動物への同情は、18世紀中頃にはイギリスの作家や思想家たちに広がり、19世紀以降アメリカにも伝えられ、19世紀後半にはアメリカで生体解剖反対運動を展開するまでになっていった<sup>1</sup>。

19世紀後半の動物擁護運動はターナー以降も、歴史研究の分野で継続的に取り上げられているが、18世紀末から19世紀前半期の動物擁護／愛護については言及されていない。その理由として考えられることは、いくつか存在する。第一に、この時期は動物擁護運動を展開するほどまだ動物擁護／愛護の精神が浸透していなかったと考えられていたこと、第二に、動物擁護運動や動物観についての研究では、思想家たちや動物の専門家たちの言説を取り上げることが中心となってきたこと、第三に、アメリカの家庭で広く読まれていた家庭向け書物が動物愛護にまつわる感性の伝搬にかかわることは言及されながらも、それを重要な史料として取り上げることはなされてこなかったこと、などがあげられる<sup>2</sup>。しかもアメリカで出版された、動物を数多く取り上げている子ども向け書物や自然史と呼ばれた書物は、その殆どがイギリスの出版物を「模倣」したものに過ぎないとされてき

1

たことから、取るに足りないものとして扱われがちであった<sup>3</sup>。その為、家庭向け書物に著された動物愛護の言説を取り上げる研究は、最近まで出てこなかった。

しかし19世紀前半期に多数出版された家庭向け書物は、中産階級の人々の文化媒体物として、また「近代家族」の出現にかかわる重要な書物として文化史研究や家族史研究では取り上げられてきた。例えば歴史家リチャード・ブッシュマンは、ヴィクトリア期の中産階級の人々の文化媒体物として当時多数出版されていた家庭向け書物が、重要な機能を果たしていたことを詳述している<sup>4</sup>。さらに家族史家メアリー・ライアンは、家庭向け書物の伝える内容の時代的変遷の分析などから、「近代家族」の登場における重要なかわりについて詳述している<sup>5</sup>。こうした流れを受けて、最近では、同時期の中産階級家庭において、動物への愛情が家庭内での倫理教育に重要な役割を果たしていたことを詳述する研究も出されている。例えば、ヴィクトリア期の物質文化について研究してきた歴史家キャサリン・グリアは、19世紀前半期の子育て書や子ども向け書物の中に、多数の動物愛護のメッセージが込められていることを取り上げている<sup>6</sup>。従って、19世紀前半期の家庭向け書物は、これまで言及されてこなかったアメリカの動物愛護の感性の形成過程を扱う上で重要な史料と考えられる。しかもその作者たちが身をおいていた社会状況や政治情勢などの背景分析まで視野に入れると、18世紀末から19世紀初頭の時代動向とのかかわりについての考察も可能となる。そこで本稿ではそれらの書物に現れる動物愛護の言説に着目し、その言説を筆者の政治的背景まで視野に入れて分析し、そこに込められたメッセージの政治的意味を読み解きたい。

アメリカで動物擁護運動を展開した人道主義者について取り上げて議論しているターナーは、当時の人道主義者たちが他者の「痛み」に敏感になったことを「産業化、都市化による古き良き時代への望郷」、即ち反近代的思考として捉えて論じている<sup>7</sup>。しかし、それでは近代以前のアメリカ社会および西洋社会が痛みに敏感な感性を持った社会であったといえるであろうか？むしろディヴィッド・モリスが『痛みの文化史』で論じているように、「痛み」への感性も近代人が獲得してきた感覚と捉えることも重要であろう<sup>8</sup>。しかもノルベルト・エリアスが指摘して以来、多数の研究者が議論しているように、近代以降「痛み」に敏感な感性は、痛みを引き起こす「暴力」をも問題化していき、暴力を制御する思考へと連動していった。従って「痛み」に敏感な気運の高まりや、「痛みの原因」である「暴力」の問題化を政治的意識として捉えることは重要であろう<sup>9</sup>。

「痛み」の感性の出現を、いかにして「痛み」の感性が政治的に構築され暴力抑制の思考へと連動していくかを分析する視座は、次の点を考察する上にも重要となる。いつ頃からいかにしてヴィクトリア時代の人々は「痛み」への感性を獲得していったのか？「痛み」に敏感な感性は、「暴力」をどのように捉えていったのか？「暴力」を防止しようとする思考は、いかなる政治的背景から派生していたのか？こうした問いのもとでアメリカ社会での動物愛護の精神は、「痛み」と「暴力」に対する感性が浸透していった過程とともに分析される必要があろう。

本論文は、以上のような観点から、19世紀前半のアメリカ社会における「近代家族」の価値観と動物愛護の感性に焦点を当て、中産階級家庭における動物愛護思想の形成を18世紀末の革命期まで遡った歴史文脈から分析描写する。19世紀前半期に多数出版され広く読まれていた家庭向け書物の中から、特に人道主義に基づく改革運動に積極的に加担していたリディア・M・チャイルド (Lydia Maria Child) およびキャサリン・セジュウィック (Catherine M. Sedgwick) による著作を取り上げて、次の三点を中心に論じていく。

第一に、動物愛護の精神と「痛み」の感性の関わりを分析するために、人道主義の起源とされる諸説と18世紀末の政治情勢について論じたい。第二に、18世紀末から19世紀はじめにかけてニューイングランドなどアメリカ北部で多数見られた流血強調の言説を取り上げ、それらがいかなる社会

的影響力を持ったかを論じたい。最後に、動物愛護を提唱する家庭向け書物の作家を取り巻く政治的背景から、動物愛護のメッセージに込められた政治意識を読み解きたい。以上の分析から、動物への愛情の提唱が「暴力」を嫌悪するイデオロギーの伝搬に深い関わりをもつ政治的メッセージであったことを論じたい。

## I. 人道主義の起源の諸説と18世紀末の政治情勢：「痛み」と「暴力」に敏感な感性の喚起

### I-1. 「痛み」への癒しを志す人道主義の起源とされる諸説

19世紀初頭に現れた暴力制御と「痛み」の軽減をめざす文化的繋がりとは、人道主義と称してさまざまな社会改革運動を展開していった。例えば19世紀前半期のアメリカで、人道主義者たちは、刑務所や精神病者収容施設、海軍や学校などでの暴力を問題化していき、死刑執行を公の場から締め出すなどの成果をあげていった<sup>10</sup>。こうした人道主義運動の起源については、これまで歴史家たちによって多数指摘されている。

例えば、クエーカー教徒たちによる1750年代の反奴隷制運動を起源として議論する研究があげられる<sup>11</sup>。イギリスのジョン・ロック（John Lock）やシャフツベリーなどのスコットランド学派による著作にその起源を求める議論もある<sup>12</sup>。カルヴァン主義の「怒れる神」の教義の厳格さを拒否したユニテリアンたちの教義に、「痛み」に敏感な感性の出現を読み取る歴史家も存在する<sup>13</sup>。あるいは、カルヴァン派の中で18世紀末から19世紀前半期に反奴隷制運動を展開したエドワーズ派のサミュエル・ホプキンス（Samuel Hopkins）を中心とするネオカルヴァン主義の教義と運動の影響力を、重視する見方もある<sup>14</sup>。最も新しい指摘として、フランス革命期の反ジャコバン主義者たちによる「暴力嫌悪キャンペーン」とも称される流血強調の言説流布が人道主義運動に重要な影響を及ぼしたとする議論があげられる<sup>15</sup>。こうしたさまざまな事柄が起源として言及されてきているが、人道主義運動は、複数の要因によって形作られていったと捉えるべきだとする指摘もある<sup>16</sup>。

こうした人道主義と深い関連性を持つ感性として議論されてきた動物愛護の精神については、スコットランド学派の影響やユニテリアンなどの教義をその起源と見て論じられてきた。例えば、ターナーは17世紀中頃、イギリスの紳士の礼儀作法の指南書に「優しい心」を紳士のたしなみとして重視する記述が見られるようになったことを、「慈悲深い同情の潮の兆し」として指摘しているが、この紳士の「優しい心」の対象は、動物にも向けられ、動物への待遇が言及されるようになったと指摘している。例えばJ.ロックが1693年の著作で「子どもは生き物を殺したりいじめたりすることを忌み嫌うように育てられるべきである」と記していたことをあげ、動物愛護の萌芽は17世紀末に現れていたとターナーは論じている<sup>17</sup>。トマスは、キリスト教の教義が17世紀後半には神の創造物のすべてがそれにふさわしい待遇を受ける権利があるという考えを受け入れる大きな転換点を迎えていたことを指摘し、カルヴァン主義の厳しい教義に批判的な動きが出てきたことを動物愛護にかかわる人道主義の起源として重視している<sup>18</sup>。

ターナーが指摘するイギリス紳士のたしなみから派生した「動物への慈悲深い同情」は、ヴィクトリア文化の特徴として貴族文化の踏襲を論ずる前述のブッシュマンの指摘と考えあわせても興味深い点が見出せる。アメリカは貴族制度を持つイギリス本国からの独立を志した時点では、自国像として「公徳心を持った平等な市民」によって営まれる共和制社会の建国を旗印に掲げていた。しかし19世紀に入り新しく富裕層に仲間入りする人々が登場すると、彼らはイギリスの上流文化、すなわち貴族の優雅さを規範とする 'gentility' を身につけることで自らの成功を確認しようとした。そうした行為は、子どもの名付け方や貴族との繋がりを見出そうとする家系図作成の流行、あるいは貴族を象徴する「小さな足」でつま先立ちした子どもの描き方にも見出せる<sup>19</sup>。子犬を抱く子ども

の絵が、図1が表すようにまさにブッシュマンの指摘する子どもの描かれ方であることは、動物愛護の上流文化との深い関わりを伺い知る重要な手がかりといえよう。

さらにトマスの指摘するキリスト教の教義の変化については、その議論は神学研究家アンドリュー・リンゼイに受け継がれ、キリスト教の教義内での動物観の変遷が詳述されている<sup>20</sup>。特に、本稿で取り上げる19世紀前半期においては、第二次信仰復興運動で多くのカルヴァン派が、その教義の厳格さに疑問を抱き福音主義に転向し、「優しいキリスト像」を広める動きが盛んになった時期でもある。厳格なカルヴァン主義の父親のもとで育ったC・セジュウィックも、ユニテリアンのウィリアム・チャニング (William E. Channing) からの影響を受けカルヴァン主義から転向した一人である。転向後の著作には、キリスト教の教えから動物愛護を唱える言説が多数著されている<sup>21</sup>。さらに、この信仰復興運動は、改革運動を押し進める重要な要因であったこともこれまでに多数指摘されており、人道主義との関係は極めて深い<sup>22</sup>。

動物愛護の精神にかかわる人道主義についてのこうした指摘に加え、本稿では、フランス革命期の反ジャコバン主義言説の大量発信による暴力嫌悪キャンペーンとの関連を議論の対象としたい。なぜなら、従来の議論からは人道主義と「痛み」の感性の直接の関わりが議論されていないからである。例えばターナーは、19世紀後半の人道主義者たちが生体解剖反対運動を展開していったことから人道主義者たちの「痛み」に対する敏感な感性を読み取っているが、彼らがいつからどのように「痛み」の感性を鋭くさせることになったのかは分析していない。これに対し、フランス革命期の反ジャコバン主義で展開された北部保守派による反ジャコバン主義言説の流布では、ことさらに「流血」が強調され、人々の「痛み」の感覚に訴えかける手法がとられており、人道主義と「痛み」の感性の関わりを探る重要な手がかりとして見逃せない。

フランス革命期、とくに「恐怖政治」の時代には、多数の流血事件が続出した。当時のアメリカ社会は、フランス革命勃発当初は同じ共和制革命として歓迎しながら、その後の「恐怖政治」での多数の血なまぐさい展開に対して、次に取り上げるように、北部保守派のフェデラリストたちが大量の反仏言説を発信するという対応を見せていった。それに連動した形で北部保守派の牧師たちから、フランスのジャコバン政権の暴力性を厳しく非難する訓戒が発信され、その後も南北戦争期までその暴力嫌悪の言説は、本稿でも後述するように奴隷制即時廃止論者たちに継続的に用いられていった<sup>23</sup>。家庭向け書物の出版の殆どが北部であったこと、その著者たちの多くが奴隷制廃止運動にもかかわっていたことなどの背景もあわせて鑑みると、そうした書物に描き出されていた動物愛護の喚起は、こうした革命期の政治的歴史文脈の中で捉えることも重要であろう。



図1 The Two Pets, published by N. Currier, New York 1848 Library of Congress, Division of Prints and Photographs.

## I-2. 18世紀末の政治情勢：民衆台頭に怯える北部保守派の流血描写と「暴力嫌悪」

激しい展開を見せていったフランス革命をめぐる、世紀転換期のアメリカ社会の対応はリパバ



リカン派とフェデラリスト派というように大きく二つに分かれ、激しい党派対立に発展していた<sup>24</sup>。フランス革命が建国初期のアメリカ社会に与えた影響についての研究で、革命期アメリカ史研究家の肥後本は、特にフェデラリスト派の政治家と北部エリート層に焦点をあて、彼ら北部保守派の反仏言説と称されるような、フランスを集中的に攻撃する言説から、民衆の台頭に対し、北部保守派がことさらに大きな恐怖を抱いていたことを詳述している。南部プランターであるジェファソンの率いるリパブリカン派の政治家たちは、当時草の根的に広がりつつあった政治組織、民主共和協会に対し歓迎する姿勢を見せていくが、名望家による上からの共和制を理想とするフェデラリスト派の政治家たちは、この「下からの政治参加」を激しく非難していた。例えばフェデラリスト派の下院議員フィッシャー・エイムズ（Fisher Ames）は、この民主共和協会に対して、反ジャコバン主義言説を用いて「パリのジャコバンクラブの運営をまねている」<sup>25</sup>と攻撃している。

こうしたフェデラリスト派の民衆台頭に対する嫌悪は、フランス革命期から1860年にかけて、北部エリート層や保守派カルヴァン主義牧師たちにも「民衆の暴力」を否定する姿勢に連動して、反ジャコバン主義言説が広がっていった<sup>26</sup>。例えば正統派プロテスタントの牧師ディヴィッド・タッペン（David Tappen）は、1795年の感謝祭の説教で、当時のフランスで展開していた「恐怖政治」の混乱をひどく嘆き、フェデラリスト政権がアメリカを流血の惨事から守っていると高く讃える説教を展開した。自由というものは、無制限状態では人間の暴力的な熱情で破壊されると警告し、「文明社会の政府は、安全で幸福な自由の享受を完成させるよう作られなければならない」と説いていた。同じく正統派カルヴァン主義の牧師セオドア・ドワイト（Theodore Dwight）は、1798年の演説でさらに強い調子で「（今のフランスは）大嵐の海であり、しかもその波は血の波である。その嵐は人間の闘争する熱情の嵐であり、そこに生息するのは獐猛な怪物であり、血なまぐさい獲物を求めて歩き回っている—その嵐が吹き荒れる海岸は、何百万もの殺された者たちの骨が打ち寄せられて白く埋め尽くされている」<sup>27</sup>と流血を強調して語っていた。北部保守派はフランスの「民主主義」を攻撃するために、流血や死体の散乱などに焦点をあててグラフィックに描写し、民衆参加の政治を「暴力的なもの」として描き出していったのである。

こうした反ジャコバン主義の言説を、北部保守派は、説教、演説、パンフレット、新聞雑誌記事、手紙などに満載し、アメリカでも流血の惨事があり得ることを広く訴え、リパブリカン派の民衆参加歓迎の姿勢を攻撃していった<sup>28</sup>。さらに一例をあげるなら、反ジャコバン作品とも呼ばれる『血まみれの浮き（Bloody Buoy）』（1796）を著したウィリアム・コッベット（William Cobbett）は、「民主主義的ジャコバン主義による危険性」をアメリカは回避するよう強い調子で次のように警告していた。

同じようなことが我々におこらないと言えるだろうか？ 我々は今のところ、平和的性質と人道的な人々を保持しているが、だからといって同様の危険を放置していてもよいのであろうか？ 我々はフランス人ではない。しかし我々も彼らと同様、人にすぎない。従って間違った導きを甘受してしまうかもしれない。彼らよりもっと低俗なレベルの野蛮な行為の底に沈むかもしれない。…だれがフランス人の首を切った殺人マシンのひとつがフィラデルフィアの連邦議会の裏庭に持ち込まれその後ずっと野放しにされることを見たいと思うだろうか。<sup>29</sup>

5

北部保守派のこうした攻撃にはエリート主義的な排他性が指摘できる。しかし彼らが「民衆の参加する政治」に対して抱いた「恐怖」は、単なる対立党派に対する「攻撃の種の捏造」と結論づけられない要素もある。例えば1794年に西部ペンシルヴァニアで「ウィスキーの反乱」と呼ばれる農民の暴動が勃発したとき、フェデラリスト政権はJ・ワシントン大統領が15000人もの兵を率いて

鎮圧に向かったほどであった<sup>30</sup>。民衆の政治的主張が、この農民の抗議行動に見られるような反乱という「暴力」を手段にして展開されていくことを、社会的混乱を招く元凶と真剣に危惧していたことが伺われる。彼らが抱いた社会的混乱への危惧が深刻なものであったことは、次のような人権概念をめぐる解釈の違いにも現れている。

マディソンやジェファソンらが率いるリパブリカン派は、人間は生まれながら自己統制の能力を持つとみる啓蒙主義的信条から、人間の生得の権利である人権のための政府の保護は、最小レベルにとどめるべきであるとする立場をとっていた。これとは対照的に、フェデラリスト派やカルヴァン主義の牧師たちは、人権は強力な社会秩序によって保護されなければならないと考えていた。こうした人権保護の必要性は、独立革命期、戦争で社会秩序が廃れていくと暴力がなお一層緊急の心配事になるという事態を経験して一段と強く意識されていた。民衆の政治参加が「伝統的服従のパターン」と「理想的市民の美德」に挑戦するものとして危惧されていた<sup>31</sup>。

民衆に対する不信感を強く抱いたエリート主義的なこうしたフェデラリスト派の保守性が1800年の大統領選挙での敗北の要因であることは既に指摘されている通りであるが<sup>32</sup>、まさにこの時期から北部保守派の反ジャコバン主義的攻撃が激しさを増していった。例えば、北部保守派の民衆台頭への嫌悪が最も明確に著されているもののひとつとして、1800年の大統領選でフェデラリスト派が野党に転落した時のエイムズの次のような言説があげられよう。

一般大衆の意見が厳粛な共和主義よりもむしろ民主主義に傾いていることこそ我々の政治の根深い悪なのだ。…我々自身に対するつけあがった自信は、脆弱でだまされやすく虚栄心の強い全てのものを、慢心させて、自分自身が掌握する権力以外にいかなるものも安全ではなく、それ故自身の権力は抑制不可能な無制限なものであるべきだという意見を吹き込んだ。これはまさに民主主義であって、共和主義ではない。フランス革命は、党派を形成する媒介となった。それは民衆の過ちを増幅させて彼らを不従順にしたのだ<sup>33</sup>。

政権奪還を期した北部保守派の反撃は、エイムズのこうした「民主主義」批判を手始めに、その後も「暴力的」民衆参加の政治展開への警戒を一層強めていく形で展開していった。

## Ⅱ. 反ジャコバン旋風を煽る北部保守派の中で育った第二世代

### Ⅱ－１. 反ジャコバン主義言説を取り入れる奴隷制廃止論者たち

北部保守派の政治家やエリート層が、上述したように南部奴隷所有者のリパブリカン派の民主共和協会への好意的態度を「民衆の扇動」と見なし、さらに民衆の台頭を暴力と結びつけて攻撃する手法をとり得たのは、南部ブランターの保持する奴隷制を「暴力の温床」として最大の攻撃の根拠とすることで正当化できたからでもある。あるいは少なくとも、人間の墮落状態を最もおそれていたカルヴァン主義の牧師たちは、奴隷制をまさに人間を墮落に至らせる最も忌むべきものとして攻撃した。例えば早くから会衆派の倫理観をフェデラリスト派の政治に反映させる役割を果たしていた牧師エリジャー・パリッシュ (Elijah Parish) は、説教の中で繰り返し奴隷制を戦争と同様に「人間に悪影響を与える元凶」として捉え、「戦いの炎を消し去る努力がなされるべきである」と唱え、野蠻行為のない大西洋社会の将来を創り出すよう苦慮していた。<sup>34</sup>

フランス革命への拒否反応として出てきた流血強調の反ジャコバン主義言説は、こうした北部カルヴァン主義の牧師たちの説教やフェデラリスト派の政治家たちの演説を通してその後も展開されていったことが、最近の反ジャコバン主義言説研究でも論じられている。この反ジャコバン主義の

最盛期は1790年から1815年であったとされるが、多くの奴隷制即時廃止論者たちがこの時期に生まれ育っていたことで、流血強調の反ジャコバン主義言説は奴隷制反対運動の形をとって継続されたとする興味深い分析がなされている。例えば、奴隷制即時廃止を唱えた白人記者ウィリアム・ロイド・ギャリソン (William Lloyd Garrison) は、反ジャコバン主義言説を精力的に展開していたフェデラリスト派政治家F.エイムズの表現を繰り返し使用する形で奴隷制廃止運動を展開していた。

1805年マサチューセッツ生まれのギャリソンは、13歳の時、地方フェデラリスト系新聞社に見習いとして入り、F.エイムズやE.パリッシュらによる政治的著作物に早くから触れていた。彼らがフランス革命やリパブリカン、暴徒の扇動者として流血描写を多用して非難するのを日常的に目にする機会を得ていた訳である。ギャリソンは、そうした反ジャコバン主義言説に対し、冷笑したり距離を置いたりするのではなく、むしろ新聞記者として自らのメッセージを社会に発信する際には積極的に取り入れていた。例えば、1828年大統領選において南部テネシー州の候補者A.ジャクソンにJ.Q.アダムズが破れた際には、1800年の選挙でエイムズが発した言説同様、フェデラリスト派の嘆きを「我々は我々の自由を誇りに思っている、しかし我々は投票によって手かせをはめられてしまった」とエイムズ流に表現している。1831年に奴隷制即時廃止を唱える機関誌『解放者 (Liberator)』の創刊号にはエイムズのジェイ条約に対して出された演説を援用している。さらにその三年後、ニューイングランド反奴隷制協会が発足した際のパンフレットにも再びエイムズのスピーチを援用している。<sup>35</sup>

ギャリソンは、中途半端な表現を好まなかったエイムズの明確な表現方法を奴隷制廃止運動にも用いて力強いメッセージを発信し、奴隷制廃止運動の新たな時代を切り開いて行った。それまで白人中産階級の運動は、漸次奴隷制廃止論が多数を占める傾向にあったが、ギャリソンは、奴隷制を即刻廃止すべきであることを、「我が家を燃え盛る炎に包まれ途方に暮れる男」に例え、「炎に包まれた家の中に取り残された幼い子どもを助け出そうとする母親」のアナロジーを使って視覚的、感覚的、情緒的に訴えかける「即時廃止論」を展開したのであった<sup>36</sup>。こうした一種激情的ともいえる表現を用いていたのは、まさに北部保守派の反ジャコバン主義言説の流れの中で修得した表現力といえよう。

ところで、流血の惨事を強調する暴力描写の言説への評価は、暴力の強調が性的刺激を伴うボルノグラフィーとして作用した側面がこれまでの研究では議論の中心となっていたため、取るにたらないものとされてきた<sup>37</sup>。すなわち、暴力描写は、猥褻な興奮を誘発するとして否定的な側面がこれまで頻繁に議論されてきた。その為、当時大量に出されていた反ジャコバン主義言説は、アメリカ社会への影響を考察する材料としては過小に評価されてきた。

しかし、南北戦争前の奴隷制廃止論者たちの反ジャコバン主義言説の分析を手がけた歴史家レイチェル・クリーヴスは、流血描写が「痛み」の感覚に訴える形で「暴力を嫌悪」する感性を強化したことを強調し、反ジャコバン主義言説の積極的評価を行っている<sup>38</sup>。民衆の暴力を制限しようとする革命期の北部保守派のあまりの熱意が、ジャコバンの悪行を並べ立てた反ジャコバン主義言説に大義を与え、それが暴力描写をひとつの道徳の表現形態と言えものにすると評価され始めたのである<sup>39</sup>。保守派が「恐怖政治」への攻撃を「民衆の暴力」阻止のために利用し、ことさらに流血強調の表現をとることで暴力嫌悪の感性に訴えていったことが、その後の奴隷制廃止運動にも受け継がれ、流血強調の言説に対する研究上の評価を変える効果を持ったのである。

7

## II-2. 家庭向け書物の作家たちの「暴力嫌悪」の表現の形と動物愛護

家庭向け書物を多数出版したC・セジュウィックやL・M・チャイルドもこの反ジャコバン主義

の最盛期に生まれた改革運動家である。両者とも北部出身者であり、子どもの頃、反ジャコバン主義の牧師の説教を聞いて育っており、先にあげた歴史家クリーヴスは反ジャコバン主義の第二世代と捉えている<sup>40</sup>。

1789年生まれのカ・セジュウィックは、北部エリート層の一員であるフェデラリスト派の父親を持ち、厳格なカルヴァン主義の家庭に育った。その父からも民衆の台頭する政治を「暴力的」と捉えて厳しく批判する言説を聞いていたことが、著書に記されている。キャサリン自身はその父親とカルヴァン主義の厳しさへの反発から、民主主義に対する嫌悪感は受け継がず、宗教上の立場も最終的には福音主義に転向している<sup>41</sup>。奴隷制反対の姿勢は、当時多くの白人改革主義者たちが唱えていた植民計画による漸次廃止の立場をとっていた<sup>42</sup>。

1802年生まれのカ・チャイルドも子どもの頃、反ジャコバン主義言説を説教に取り入れて影響力を持ったカルヴァン主義牧師の教会に通って育った反ジャコバン主義第二世代である。後に多数の家庭向け書物を著していくが、平和主義者としての活躍も著名で、南北戦争直前まで暴力を用いないで、すなわち戦争という手段も取らず奴隷制を廃止すべき／できるとする立場をとっていた。しかし奴隷制即時廃止を唱えるジョン・ブラウン（John Brown）らによるハーパーズフェリーでの一連の襲撃事件には強い関心を示し、「私もシャーロット・コーディのような殉教者になるべきだ」<sup>43</sup>と心境の変化を著している。南北戦争開始時には、奴隷制という暴力的制度を廃止するための戦争には容認の立場をとった<sup>44</sup>。

反ジャコバン主義第二世代であるセジュウィックやチャイルドは、第一世代ほど民主主義に対する嫌悪感は持っておらず、流血をことさらグラフィックに強調して多用するという表現形式もとっていない。しかし彼女たちの著作を注意深く読んでいくと、次のような、反仏的言説やジャコバンの恐怖政治批判が登場することから、流血強調の反ジャコバン主義言説による暴力嫌悪のキャンペーンの影響を見出すことができる。

例えばセジュウィックは、体の弱い少女とその少女を警護する愛犬の心温まる話を子どもに語って愛情重視の道徳教育を行う母親像を描き出す著作の中で、猛犬ブラッドハウンドをハイチの独立革命でフランス軍が「黒人狩り」に使用した話を展開している<sup>45</sup>。愛情深い従順な動物として語られる犬が、他方では暴力的訓練を受けることでいくらかでも凶暴になりうることを、読者である子どもたちに教唆している。しかもそうした操作された凶暴性が人間の暴力行使の手段として利用され得ることを、フランスの悪行とともに論じる形が用いられている。

家庭向け書物の中で、突如としてハイチ革命という政治の話題を取り入れ、しかも黒人に襲いかかる猛犬の恐ろしさを語って聞かせる母親像を描き出すのは唐突で少し不自然でもある。しかし敢えてセジュウィックはこうした話の展開をおこなっていた。ここにはひとつには、フランス革命を激しく非難した北部保守派の反ジャコバン主義言説の影響を色濃く読み取ることができよう。

しかしそれだけでなく、著者セジュウィックは、さらに踏み込んで、暴力が暴力を生み出すという暴力の連鎖的性質を提示し、ハイチの独立革命という「家庭の裏庭」を超えたもっと大きな設定を創り出し、そうした社会的暴力も含めた形で暴力を否定するという政治的イデオロギーを込めていることが読み取れる。しかもそれは、この猛犬ブラッドハウンドを言及したあとに子どもたちに、一転して今度はそれとは対照的な、彼ら子どもたちの身近にいそうな少女クララと愛犬フットの姿を思い浮かべさせることで、より一層効果的に提供されているといえまいか。

クララというその病弱な少女は、いつも愛犬フットに寄り添われてさまざまな危険から身を守って暮らしている。その様子は例えば、いつものように意識を失って倒れてしまった時、その倒れた少女が意識を回復させるまで愛犬フットが片時も離れず見守る姿として描き出されている。フット



は、クララが摘み取ったラズベリーの赤い実が入ったかごの番をして静かに時が過ぎるのを待つのである。遠いハイチの地で、黒人たちを獐猛に追撃するよう訓練された犬の恐ろしさをつい今しがた語られて恐怖による緊張感を覚えた子どもたちは、少女に寄り添って静かにその少女の身の安全を守るフットを想像することで、そこに安堵感を覚えることになるのではないだろうか。すなわち緊張感と安堵感をそのエピソードは読者である子どもたちに与えることで、感覚的に筆者セジュウィックの暴力を嫌悪する感性を感じ取れるよう設定されているといえまいか。

他方、L. チャイルドは、1843年から45年にかけて出版されたエッセイ *Letters from New York* のなかで、動物が都市で虐待される光景に心を痛める記述を著し、そこで次のような反ジャコバン主義の表現を用いている。

動物たちが一日300頭の割合で殺されていく。都市の安全のためにこれらの駆除が必要とされていることは明らかなが、そのやり方はひどく過酷で残虐で、混乱したものとして私は衝撃を覚える。このかわいそうな動物たちは、舗道で打ちのめされ、むち打たれて命を落とす。[中略] 犬殺しの集団それ自体も、恐ろしい風体である。血の付いた棍棒と乱れた服装で、彼らは私に恐怖政治を思い起こさせる。流血の暴徒に参加するなどという野蛮な光景は、到底幼い子どもたちには受け入れさせられない。<sup>46</sup>

チャイルドのこの文章は、「恐怖政治」や「流血の暴徒」という記述が見られることから、前述したセジュウィックの著作より、さらに明確に流血描写を強調する反ジャコバン主義の影響を色濃く読み取ることができる。都市の安全のためには野犬狩りも必要悪であると認めながら、チャイルドはむしろ、野犬狩りをおこなう「流血の暴徒」の恐ろしさを、「血の付いた棍棒」を持ち歩く姿を読者に思い起こさせることによって強調している。すなわち彼ら野犬狩りの集団の方が、街に屯する動物たち以上に危険な存在であるとみていることが、「かわいそうな動物たち」という記述からも明らかとなっている。例え動物たちが相手であったとしても、流血の暴徒たちが血なまぐさい野蛮な行為を展開することは、「衝撃的」で「到底受け入れられない」光景であることを、この記述は広く知らせようとしているのである。

チャイルドが暴力を否定する平和主義者であったことは、これまでも多数指摘されてきた。しかしそれではなぜ、流血の暴徒の危険性を喚起するのに野犬狩りの光景を取り上げたのか。その点を考察するのに重要と思われるのが、引用最後の「子どもたち」への配慮である。

流血を伴う「野蛮な光景」は、その野蛮行為の対象がたとえ動物であったとしても、見ている者への影響は同じであり、「決して受け入れさせられない」ものとチャイルドには受け止められていたと思われる。流血強調の反ジャコバン主義言説を聞いて育ったチャイルドの「痛みに敏感」な感性は、小動物を打ちのめして流血させる犬殺しの集団さえも「恐怖政治」を思い起こさせる許し難い暴徒として見逃せなかったのであろう。そうした小さな暴力さえも嫌悪する自らの感性を活かし、「打ちのめされる犬の痛み」という当時の都市の中で当たり前のようにおこなわれ見過ごされがちであった小さな惨事を取り上げることが、自らの重要な使命と自覚していたのではないだろうか。その感性を子どもたちにも継承してもらうことを自らの政治的役割と心得て、敢えて動物という他の人では見過しがちな存在に焦点をあててメッセージを発信したのではないだろうか。

9

## 結びにかえて

19世紀前半期の動物愛護のメッセージにこうした政治的色彩が込められている例は他にも存在す

る。例えば *Lessons Derived from the Animal World* (1847) では、フランス革命期のテルミドル反乱で失脚したロベスピエールの愛犬が、主人の処刑場に駆けつけ、ギロチンが振り下ろされた後も決してその主人の足下から離れようとはしなかったという忠誠心を感じ傷的に描出する逸話が掲載されている<sup>47</sup>。「近代家族」に提供された家庭向け書物の中で描き出されていた動物愛護は、本稿で論じたように、「暴力嫌悪の感性」を喚起する政治的イデオロギーの媒体物として、革命期からの歴史文脈の中で形成されてきたものと捉えると、動物愛護のメッセージの役割に関する評価も重要性が増すのではないだろうか。

## 註

- 1 Keith Thomas, *Man And The Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800* (1983)／キース・トマス著（山内昶監訳）『人間と自然界 — 近代イギリスにおける自然観の変遷』法政大学出版局、1989年；James Turner, *Reckoning with the Beast: Animals, Pains, and Humanity in the Victorian Mind* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1980)／ジェームズ・ターナー著（斎藤九一訳）『動物への配慮 — ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』法政大学出版局、1994年。
- 2 例えばイギリスの動物観の歴史の変遷を詳述しているH・リトヴォは、「動物の登場するおびただしい寓話や幻想文学は、現実の動物とはほとんど関係がないのでまったく例をひかなかった」と述べている。Harriet Ritvo, *The Animal Estate: The English and Other Creatures in The Victorian Age* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1987)／ハリエット・リトヴォ著（三好みゆき訳）『階級としての動物 — ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』国文社、2001年：13頁。
- 3 ターナー、前掲書参照。
- 4 Richard L. Bushman, *The Refinement of America: Persons, Houses, Cities* (New York: Alfred A. Knopf, 1992)
- 5 Mary P. Ryan *The Empire of the Mother* (New York: The Haworth Press, 1982)
- 6 Katherine C. Grier, *Pets in America: A History* (Orlando: Harcourt, Inc, 2006); Katherine C. Grier, "‘The Eden of Home’: Changing Understandings of Cruelty and Kindness to Animals in Middle-Class American Households, 1820-1900" in *Animals in Human Histories: The Mirror of Nature and Culture*, Mary J. Jenninger-Voss, ed. (New York: University of Rochester Press, 2002), 316-362.
- 7 ターナー、前掲書。
- 8 デイヴィッド・モリス著（渡邊勉他訳）『痛みの文化史』紀伊國屋書店、1998年。
- 9 西欧社会の近代化の過程を詳述し研究上に長年にわたって多大な影響力を持ったN・エリアスは、「自己抑制」を近代の新しい感情のスタイルとみる議論を展開している。Norbert Elias, *The Civilizing Process: Sociogenetic and Psychogenetic Investigations*, rev. ed., trans. Edmund Jephcott (Malden, Mass.: Blackwell Publishing, 2000)／ノルベルト・エリアス（波田節夫他訳）『文明化の過程・下』法政大学出版局、2004年：333-358頁；エリアスの議論に対し、懐疑的な見方もあるが、他方で、欧米社会で17世紀から19世紀前半にかけて私的な暴力が減少したとする点などからエリアスを支持する研究も多数出されている；Barbara H. Rosenwein, "Worrying about Emotions in History," *American Historical Review* 111 (Feb. 2006), 821-845; Martin J. Weiner, *Men of Blood: Violence, Manliness, and Criminal Justice in Victorian England* (New York: Cambridge University Press, 2004); Eric Monkkonen, "Homicide: Explaining America's Exceptionalism," *American Historical Review* 111 (Feb., 2006), 76-94; Peter Spierenburg, "Democracy Came Too Early: A Tentative Explanation for the Problem of American Homicide," *American Historical Review* 111 (Feb., 2006), 104-114.
- 10 Myra C. Glenn, *Campaigns Against Corporal Punishment: Prisoners, Sailors, Women and Children in Antebellum America* (Albany: State University of New York, 1984)

- 11 例えば Sydney V. James, *A People among Peoples: Quaker Benevolence in Eighteenth-Century America* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1963); Jack D. Marietta, *The Reformation of American Quakerism, 1748-1783* (Philadelphia, Pa.: University of Pennsylvania Press, 1984)
- 12 例えば Philip Gould, *Barbaric Traffic: Commerce and Antislavery in the Eighteenth-Century Atlantic World* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2003); Andrew Burstain, *Sentimental Democracy: The Evolution of America's Romantic Self-Image* (New York: Hill and Wang, 1999); Karen Halttunen, "Humanitarianism and the Pornography of Pain in Anglo-American Culture," *American Historical Review* 100 (Apr., 1995), 303-334.
- 13 例えば Dan Mckanan, *Identifying the Image of God: Radical Christians and Nonviolent Power in the Antebellum United States* (New York and Oxford: Oxford University Press, 2002)
- 14 例えば Peter Hinks, "Timothy Dwight, Congregationalism, and Early Anti-Slavery," in *The Problem of Evil: Slavery, Freedom, and the Ambiguities of American Reform*, Steven Mintz and John Stauffer, eds. (Amherst, Mass.: University of Massachusetts Press, 2007); Kenneth P. Minkema and Harry S. Stout, "The Edwardsean Tradition and the Antislavery Debate, 1740-1865," *Journal of American History* 92 (2005), 47-74; Joseph Conforti, "Samuel Hopkins and the New Divinity: Theology, Ethics, and Social Reform in Eighteenth-Century New England," *William and Mary Quarterly* 32 (1977)
- 15 例えば Rachel Hope Cleves, *The Reign of Terror in America: Visions of Violence from Anti-Jacobinism to Antislavery* (New York: Cambridge University Press, 2009)
- 16 例えば Elizabeth B. Clark, "The Sacred Rights of The Weak: Pain, Sympathy, and the Culture of Individual Rights in Antebellum America," *Journal of American History* Vol.82 No.2 (Sep., 1995): 46.
- 17 ターナー、前掲書：特に第2章。
- 18 トマス、前掲書。
- 19 Bushman, op.cit., 295-301; Elsdon C. Smith, *The Story of Our Names* (1950; Detroit: Gale Research, 1970); Daniel Scott Smith, "Child-Naming Practices, Kinship Ties, and Change in Family Attitudes in Hingham, Massachusetts, 1641 to 1680," *Journal of Social History* 18 (Summer 1985), 556-59.
- 20 Andrew Linzey, *Animal Theology* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1994)／アンドリュース・リンゼイ著（宇都宮秀和訳）『神は何のために動物を造ったのか ―動物の権利の神学』教文館、2001年。
- 21 この点に関しては以下を参照されたい。拙稿、「19世紀前半アメリカの『家族』における動物と『痛み』の感性 ―動物愛護が語られる場としての『近代家族』に焦点をあてて」『国際経営・文化研究』Vol.15 No.2（2011年3月），67-82.
- 22 第二次信仰復興運動については、以下のものを参照した。；Curtis D. Johnson, *Redeeming America: Evangelicals and the Road to Civil War* (Chicago: Ivan R. Dee, 1993), 3-17; McKanan, op.cit.; Valarie H. Ziegler, *The Advocates of Peace in Antebellum America* (Macon, Georgia: Mercer University Press, 2001)；尚、動物愛護思想形成における第二次信仰復興運動の影響については別の機会に詳述したい。
- 23 フランス革命後勢力をのびしたジャコバン政権は、1793年の9月革命で200人以上の牧師を処刑した。アメリカの正統派牧師たち、とくに会衆派および長老派の牧師たちは反フランス革命の姿勢を打ち出していく。例えば次のような説教があげられる。「フランス革命は恐怖と野蛮の精神を生み出している。フランス革命は虐待と残虐そして殺人によって神に嘆願することを目論んでいる。」Samuel Williams, *The Love of Our Country Represented and Urged* (Putland, Vt., 1792)；こうしたフランス革命の暴力性を強く非難する牧師たちの言説はW.L.ギャリソンのような急進的な即時奴隷制廃止論者たちの主張に読み取ることができる。詳しくは Cleves, op.cit.: 230-275.
- 24 例えば、肥後本芳男「フランス革命とアメリカ建国初期におけるフェデラリスト」『アメリカ研究』27（1993），73-93頁を参照されたい。

- 25 Ibid. : 79の引用を用いた。
- 26 Cleves, op.cit.
- 27 David Tappen, *Christian Thankful Explained and Enforced: A Sermon, Delivered at Charlestown, in the Afternoon of February 19, 1795. Day of General Thanksgiving through the United States* (Boston, Mass., 1795): 22; Theodore Dwight, *An Oration, Spoken at Hartford, in the State of Connecticut, on the Anniversary of American Independence, July 4<sup>th</sup>, 1798* (Hartford, conn., 1798) : 引用は17.
- 28 Rachel Hope Cleves, "On Writing the History of Violence," *Journal of the Early Republic* 24 (winter 2004), 641-665: 649.
- 29 William Cobbett, *The Bloody Buoy: Thrown out as Warning to the Political Pilots of All Nation: Or a Faithful Relation of a Multitude of Acts of Horrid Barbarity, Such as the Eye Never Witnessed, the Tongue Never Expressed, or the Imagination Conceived, until the Commencement of the French Revolution* (1796: Philadelphia, Pa., 1797) : 引用は222.
- 30 ウィスキーの反乱については以下の研究を参照した。肥後本芳男、前掲論文；Cleves, op.cit.
- 31 北部保守派の人権と社会秩序についての考え方は、例えば次の著作に現れている。Nathaniel Chipman, *Sketches of the principles of Government* (Rutland, Vt: 1793)；独立革命期の共和制の脆弱さへの危惧についての研究には例えば次のようなものがある。Gordon S. Wood, *The Creation of the American Republic, 1776-1787* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1998)；伝統的秩序の崩壊については次のものを参照されたい。Gordon S. Wood, *The Radicalism of the American Revolution* (New York: Vintage Books, 1993)
- 32 肥後本、前掲論文。
- 33 *The New-England Palladium*, November 20, 1801, in William B. Allen, ed., *Works of Fisher Ames*, as Published by Seth Ames (Indianapolis, 1983) I, 242-243；引用は肥後本、前掲論文、89頁より。
- 34 "Sermon XIV," in Elijah Parish, *Sermon, Practical and Doctrinal with a Biographical Sketch of the Author* (Boston, Mass., 1826): 281-291.
- 35 ウィリアム・ロイド・ギャリソンについては以下を参照した。；Marc M. Arkin, "The Federalist Trope: Power and Passion in Abolitionist Rhetoric," in *Journal of American History* Vol.88 No.1 (Jun., 2001), 75-98; Cleves, op.cit.
- 36 ギャリソンがフェデラリスト派の反ジャコバン主義言説を踏襲していたことについては、Arkin, op.cit: 86-98を参照した。引用は、Arkin, op.cit.: 89.
- 37 Ibid.: 89-90.
- 38 例えば次の論文を参照されたい。Halttunen, op.cit.
- 39 Cleves, 2009.
- 40 Roland Barthes, *Writing Degree Zero*／ロラン・バルト（森本和夫・林好雄訳）『エクリチュールの零度』筑摩書房、1999年、19-59頁；Cleves, 2004, 662.
- 41 Cleves, 2009: 230-275.
- 42 Mary E. Dewey, ed., *Life and Letters of Catharine M. Sedgwick* (New York, 1871), 35；セジュウィックのこの信仰上の転向に関しては、以下の自伝的小説にも詳述されている。；Sedgwick, *A New-England Tale; or Sketches of New England Characters and Manners* (1822; New York: Oxford University Press, 1995)
- 12 42 セジュウィックの著作活動と奴隷制廃止運動への関わりについては以下のものも参照した。；Dan Mckanan, *Identifying the Image of God: Radical Christians and Nonviolent Power in the Antebellum United States* (Oxford, New York: Oxford University Press, 2002)
- 43 Lydia Maria Francis Child and John Greenleaf Whittier, *Letters of Lydia Maria Child: With a Biographical Introduction by John G. Whittier* (Boston, Mass., 1883), 79, 115, 143.
- 44 チャイルドがハーパースフェリーの襲撃後のJ・ブラウンに強い関心を示していたことが最近の研究で論じられている。詳しくは、Janet Kemper Beck, *Creating the John Brown Legacy: Emerson, Thoreau, Douglass, Child and*



*Higginson in Defense of the Raid on Harpers Ferry* (Jefferson, North Carolina, and London: McFarland & Company, Inc., 2009)

- 45 Sedgwick, "Dogs," in *Stories for Young Persons* (New York: Harper & Brothers, 1840), 153-163.
- 46 Lydia Maria Child, *Letters from New York* (New York: C S. Francis, 1843): 10.
- 47 Anon. *Lessons Derived from The Animal World* (London: 1847): 8-9.

(受理 平成23年9月26日)

